

幼児の母



昭和十五年二月

想像の強い子

久米京子

わが子の幸福

倉橋惣二

わが子の幸福を願はない親はありません。そのためには、どんな工夫をしてで

もと思ひます。ところが、どういふことが、一番の幸福といふことになります。

幼稚園で友達と遊んでゐる我子を御覧するだけほんとうの幸福を與へたいものであります。ほんとうの幸福は、今樂しいと共に何を與へても喜ぶのが子どもです。出来

なさい。眞の子どもの世界で、一ぱいに子どもしさを楽しんでゐます。この幸

福が後のためにならないことがあります。生きることです。そして、子どもは心のあ

りだけ力のかぎ遊んでゐる時こそ、ほんとうに生きてゐるのです。これが一番の幸福でないと誰れがいひ得ません。そこで、幼い時は

頬を見合せて。

父親タインライターを打つて居る。幼稚園一年の妹、周囲をビヨン／＼飛びはね乍らタインライターと題して即興詩を歌ふ。「ダン／＼の様にはねかして、チンと鳴つてもうお終ひ。×××庭で折角探つてテントウ蟲に逃げられた或る朝、登

園の途中道端で一匹のテントウ蟲を發見して「わ!! 今朝のお蟲だ。矢張り南が好きだからついて來たんだ。」×××數ヶ月

を終たある日食後の鬱樂、母親「富士山の上にはね、夏でも雪があるのよ」小學一年の兄「フーン」妹傍から「さう!! 私赤ちゃんの時、ママのポン／＼の中でそ

の雪見た。」一同笑。こうまで自在な彼女の空想には一同あきれて顔見合はすばかり。子供の想像の奔放さは、どこまで

发展させていくものでせうかと、これも